



Precious
進化するボクら
days

猫ト みかん。

1話 森さんと鳥野くんは恋人同士

机の上に両肘をついて指を組み合わせ、その上にちょこんと顎をのせた森さんは、向かいに座る鳥野くんをじーっと見つめていた。一方の鳥野くんはじーっと机に置いた本に瞳を向けている。

図書室の窓際の大机に二人、向かい合って座っていた。カーテンの隙間から一条のオレンジが差し、境界線のように二人を仕切っている。文庫本の棚の前では、女の子が三人、声をひそめて笑いあっていた。入り口に近い机には図書委員の男の子が一人、ぼんやりと時計を見上げている。締め切られたドアの向こうから、合唱部の練習する歌声がかすかに響いていた。

森さんはそっとため息を吐いてみた。しかし、鳥野くんは気づいた気配も見せずに、親指で静かにページを繰る。

「いちゃいちゃしたいです」

「え？」

決死の覚悟で森さんが口にした台詞を、聞き逃したらしい鳥野くんが顔を上げて首を傾げた。眼力で伝われ、とばかりに森さんは瞳に力を込める。

鳥野くんは、壁に掛かっている時計を見上げた。

「先に帰っていていいよ？」

「そうじゃなくて」

「何が？」

「いちゃいちゃしたいのです」

呆れたような視線でも、こちらを向いてくれた嬉しさに、森さんはえへへと頬を緩める。

「いちゃいちゃって、例えば？」

鳥野くんは足を組み替えた。

「えっと、手をつないだり、とか」

「とか？」

とか、の先を色々と思いつかべて森さんは口を開いては閉じた。耳が熱くなって親指と人差し指でつまむ。

チャイムが鳴った。

下校時間を告げる放送が流れる。

文庫本の本棚の前にいた女の子たちはいつの間にかいなくなっていた。図書委員の男の子がちらりちらりと森さんたちの方へ視線を送っている。鳥野くんはぱたりと本を閉じた。椅子を引いて、立ち上がる。その動作を森さんは座ったまま瞳で追っていた。

「帰らないの？」

鞆に本を入れた鳥野くんが森さんを見る。

「帰ります」

勢いよく森さんが立ち上がると、椅子が大きな音を立てた。先に立って行ってしまおう鳥野く

んを、静かに椅子を直してから急いで追いかける。図書委員の男の子に小さく会釈をして、図書室を出た。

廊下で鳥野くんは待っていた。廊下の奥の階段を何人かの生徒がにぎやかに降りていく。話し声と足音が響いて、やがて小さくなっていった。

鳥野くんは右手に鞆を持ち、左手を手の平を森さんに向けて少し浮かせた。森さんはその意味を正しく理解すると、思う存分頬を緩めて、鳥野くんの隣りに並んだ。

2話 桜木さんの好きな人

桜木さんの苦手科目は数学だ。

「苦手というか、数字がわたしを拒絶するの」

とは、桜木さんの言い分である。

それでも桜木さんは、数学の予習復習は欠かさないのだから偉いものだ。それでも数学の成績が赤いのは、本当に拒絶されているからかもしれない。

「わたしと一緒に、成績もどきどきして赤くなっちゃうのよ」

と、これも桜木さんの言い分である。ただの親父ギャグのようである。

「桜ちゃんの努力は可愛いと思うわ」

森さんが大人びて微笑んだ。授業が開始するまであと3分。教室はまだ騒がしかった。

「うへへ、ありがとうリンリン」

睨み付けていた数学の教科書から顔をあげて、桜木さんは相好を崩す。

「でも、武藤先生、結婚しているのじゃあないかしら？」

「結婚指輪はしていなかったもの」

「目ざとい」

「当たり前よう」

鼻の頭を上げてから、肩をすくめて苦笑する。

「でもさ、関係ないよね。結婚しててもしてなくても。年の差だって何だって」

「青いね」

「そうかもね」

「やっぱり可愛いな、桜ちゃん」

「よせやい」

桜木さんが照れて教科書で顔を覆うと同時に授業開始のチャイムが鳴った。

3話 千草くんの好きな人

「森ちゃん」

教室の入り口で、千草くんは声を上げ、顔の横で手を振った。

桜木さんとおしゃべりしていた森さんは、千草くんに気がつくとドアの所までやって来た。

「何か忘れ物？」

森さんがちょっと首を傾げて問うと、

「英和！」

拝むように千草くんが手を合わせた。

「持って帰って勉強してるの？」

廊下へ出て、森さんは自分のロッカーの扉を開く。中は辞書も教科書もよりどりみどりだった

。

予鈴が鳴って、廊下で話していた生徒たちがばらばらと動き出す。

「姉ちゃんと共用なんだよ。高いし、どうせ大して勉強しないんだからいいだろって。まあそりゃそうなんだけどさー」

「それはそれは。わたしは大体置いてるから、いつでも貸せると思うよ」

「森ちゃんは女神だ！」

差し出された英和辞書を捧げるように受け取って、千草くんは頭を下げた。

「褒め言葉としては微妙です」

微妙に森さんが微笑む。

「次回までに勉強しときますっ」

千草くんは満面で笑んで、鳴り始めた本鈴に、急ぎ足で隣の教室へ入っていった。

4話 写メ（森さんと鳥野くん）

To:鳥野くん

From:森さん

件名：今日はカレーでした！

添付 1 件

To:鳥野くん

From:森さん

件名：チューリップ♪

添付 2 件

To:鳥野くん

From:森さん

件名：猫を発見しましたが逃げられました。

添付 1 件

「あのさ」

鳥野くんは、携帯電話を片手に教室の森さんの席にやってきた。

「はい」

「大したことじゃないのに、いちいち写メ送るのやめようよ」

「あら」

「迷惑」

きっぱりと告げられて、森さんは頬に片手を当てる。

「だって、わたしの見てる景色を、鳥野くんにも見せたいんだもの」

鳥野くんは眉をしかめたまま、口を噤んだ。

その顔を、かしゃこと森さんが携帯で写真を撮る。

「何するの」

「わたしに困らされてる鳥野くん。これは送ってあげませんよ。独り占めです」
大事そうに携帯を胸に引き寄せ、森さんが肩をすくめて微笑んだ。

「……」

鳥野くんは、森さんの頬を両側から片手でわしっと掴み、片手でぴろんと写真を撮った。

「何するんですか」

「変な顔。独り占め」

撮った写真を見て、ぱっと鳥野くんは吹き出した。

5話 泉くんは恋人募集中

泉くんは、勢いよく両手を鳥野くんの机についた。

「彼女が欲しい！」

熱いまなざしの泉くんを、冷めたまなざしで鳥野くんは一瞥する。

「つくれば？」

「彼女がいる奴の台詞！ 森さんくれよ！」

泉くんが身を乗り出すと、少し離れた席で、椅子の倒れる音がした。

「お断りです！」

森さんだ。

「だってさ。振られたね」

鳥野くんは生温かい微笑みで泉くんを見上げた。

「二人そろってひでえよ！」

「面倒なだけじゃない？」

鳥野くんの台詞に、再び少し離れた席で、椅子の倒れる音がする。

「わたしも、そんな面倒くさい鳥野くんが大好きです！」

森さんだ。

「意味が分からないな、お前ら」

「ほっとけ」

鳥野くんがため息をつく。泉くんは鳥野くんの前の席に座った。

「高校っていったら青春じゃん。彼氏彼女できゃっきやうふふな青春だろう？」

「それはお前の偏見じゃないの」

頬杖をついてうな垂れる泉くんを鳥野くんは半眼で返した。

「だから一、彼女が欲しいの」

「まず好きな子を作れよ」

「うわ」

「何だよ」

「鳥野に正論言われた」

教科書の角で、泉くんは思い切り叩かれた。

6話 君の痕（桜木さん）

帰り支度を済ませた桜木さんは、廊下を歩いていた。

ふと、窓に視線をやると、渡り廊下に武藤先生を見つけて立ち止まる。

「下校時刻を過ぎていますよ。早く帰りなさい」

武藤先生は開いた窓から、外で遊んでいた生徒に声をかけていた。窓越しに届く微かな声に、桜木さんは耳を澄ます。その姿を見つめているだけで頬が緩んでしまう。

外の生徒たちを見送ると、武藤先生は視線を上げた。目が合ったような気がして、桜木さんは反射的にその場にしゃがみ込む。飛び出しそうな心臓を、口を押さえて懸命に落ち着いた。ゆっくり十秒を数えた。廊下はすでに人がなく、外から聞こえていた生徒たちの声も小さくなって消えていく。

おそるおそる、桜木さんは膝を伸ばして、窓の向こうに目を向けた。

渡り廊下の窓はすでに閉まり、そこには誰もいない。

ほっとしたけれど、期待はずれのような気もした。

鞆の持ち手をきゅっと握り、桜木さんは歩き出した。廊下に、桜木さんの足音が響く。急ぎ足で足音を立てていた桜木さんは、足音が響きすぎることに気がついて、そっと音を潜めるように静かな歩き方に切り替えた。

昇降口へ向かう階段を降りずに、角を曲がって、渡り廊下に足を踏み入れる。悪いことをしようとしているみたいに、そっとそっと足音を忍ばせた。

「ここだった、かな」

一瞬見た、武藤先生の立ち位置を思い返し、その場に立つ。窓にそうっと手を触れた。校門が見える。帰っていく生徒たちの背中が見えた。先刻までここに武藤先生が立っていたんだな、と思うだけで頬が緩んでしまう。

「もう、下校時刻は過ぎていますよ。早く帰りなさい」

唐突に割り込んだ声に、桜木さんは硬直する。

「？ どこか具合でも悪いのですか？」

石みたいな体をくるっと回して桜木さんは声の主の背を向けた。

「だ、大丈夫です！ 帰ります、今すぐに！」

ぎこちなく一步を踏み出すと、そのまま廊下を走り出す。

「廊下は走らない！」

「はいっ」

少し上擦る声で元気に答えた桜木さんは、階段を一段飛ばしに駆け下りような足を一生懸命こ

らえた。

7話 千草くんのフラグ

朝。登校途中に森さんと遭遇。

「あ、おはよう千草くん」

笑顔で森さんは手を振ってくれた。隣りに仏頂面の男子生徒がいた気がするが、細かいことは気にしてはいけない。

英語の授業があった。

運良く英和辞典はまた姉に奪われたままだ。森さんに借りにいった。

「はい、どうぞ」

手渡される時、ちょこっと指が触れた。奥から突き刺さるような視線が飛んできていた気もするが、気にしてはいけない。

昼休み。購買合戦に出遅れて、大好きな焼きそばパンを買い損ねた。

「良かったら、食べますか？ たまに購買だと買いすぎちゃって」

嘆いていると、森さんがクリームパンを差し出してくれた。甘すぎて胸焼けがしたが、本望だ。

。

そして放課後。

「もうさ、これってフラグじゃない？」

「何の」

「俺と森ちゃんの愛の！」

「幸せな奴だなー千草は」

「幸せで何が悪い。よし、この勢いで一緒に帰ろうって誘うぞ！」

「はいはい。がんばってなー」

スキップ混じりに隣の教室に向かう。

「森ちゃーん」

がらりと扉を開けたところで、幸福が尻尾を巻いて逃げていきそうな顔の男子生徒に出くわした。

「……」

「痛っ」

無言で足を踏まれた。

冷たい視線の一瞥を投げて、男子生徒は廊下に出るとすたすたと行ってしまう。

「あ、鳥野くん、待ってください」

「ぎゃ」

ぱたぱたとやって来た森さんに足を踏まれた。

「ご、ごめんなさい千草くん」

「いや、大丈夫……………これもきっとフラグだ」

「大丈夫？ 本当にごめんなさい。ちょっと急いでいるので、行きますね」

「うん、気にしないで。また明日」

ひらひらと手を振ると、森さんは綺麗に微笑んで行ってしまった。自分、涙目だったけど、気にしてはいけない！

8話 泉くんと五十嵐さんは友だち同士

泉くんと五十嵐さんは真っ赤な顔をして手を握り合っていた。

腕相撲だ。

ぱたーん、と白い方の手が、大きい方の手を押し倒す。

「あぁーっ！」

「よっし。勝ったー！」

万歳と手を挙げ、快哉を叫んだのは五十嵐さんだ。

「ありえねえ。何てこった」

机に突っ伏し、嘆いているのは泉くんだ。

「ふふん、弓道部で鍛えたこの右腕、舐めてもらっちゃ困るわ。ということで、ジュース驕りね。オレンジジュース、粒入りで！」

五十嵐さんは片手でさっと前髪を撥ね、勝者の権利を主張する。

「あー。俺も弓道部入ろっかなー。袴姿とかモテる気がする」

「そんな不純な動機の奴は、お断りだ」

「ちえー」

「泉と五十嵐さんって仲いいよなー。というか泉、彼女欲しいんなら五十嵐さんと付き合えばいいじゃん」

傍で見ていたクラスメイトが口を挟んだ。

「え」

泉くんと五十嵐さんは顔を見合わせる。

「それはないなー」

「ないわねー」

同時に生温い笑みで首を振った。

「気の合う男友達だと思ってるけどな」

すぱーん、と間髪開けず、泉くんは五十嵐さんに額を叩かれる。

「わたしは、しょうもない友達だと思ってるわ」

泉くんと五十嵐さんはそんな友だち同士です。

9話 可愛いね（森さんと鳥野くん）

森さんは、にこにこと上機嫌に微笑みながら、鳥野くんの机の前に立った。

鳥野くんは文庫本を読んでいる。

「鳥野くん」

鳥野くんが顔を上げてくれないので、森さんは可愛い声で名前を呼んだ。

「何」

「見てください、見てください」

鳥野くんが顔を上げてくれないので、森さんはお願いした。

鳥野くんは面倒そうに顔を上げる。

「何」

「わたし、いつもとちょっと、違いますか？」

にこにこと森さんが微笑むと、鳥野くんは一層面倒そうに顔をしかめた。

「いつもより阿呆っぽい」

「これです！ 可愛いピンを買ったのです」

森さんはこれ以上鳥野くんの顔をしかめさせないために、仕方なく気づいてほしいことを告白した。

「ふうん」

以上で反応を終り、鳥野君は再び文庫本に視線を落とした。

「……」

森さんは口をきゅっと引き結び、ピンを外すと、手を伸ばして鳥野くんの髪にぱちんとつけた。

。

「な」

鳥野くんが口を開けて、顔を上げる。

「可愛いですよ、鳥野くん」

森さんは微笑んだ。

鳥野くんはため息をついて立ち上がる。ピンを外すと、森さんの髪にぱちんとつけた。

「可愛いですね、森さん」

「えへ」

森さんは頬に両手を当てる。鳥野くんは読みかけの文庫本に葉を挟み忘れたことに気がついてため息を洩らした。

10話 指先（桜木さん）

ふんふんと鼻歌を歌いながら廊下の角を曲がった桜木さんは、早足で角を曲がってきた誰かにどーんとぶつかった。

たたらを踏んだ桜木さんは、顎を引く。白いものがばさばさと音を立てて舞った。プリントだ。

「すみません、大丈夫でしたか？」

大丈夫です、と答えようとした桜木さんは、息を吸い込んで固まった。何を隠そう、ぶつかった相手は武藤先生だ。

「どこか怪我を？」

桜木さんが硬直してしまったので、武藤先生が心配そうに身を屈めた。

慌てて桜木さんが首を振る。勢いが良すぎて、くらりと眩暈を覚えた。よろめいた桜木さんに、

「大丈夫ですか？」

重ねて武藤先生が問う。

かくかくと桜木さんは今度は縦に首を振った。ぐるぐると頭の中がシェイクされて目がチカチカしたのを、屈んで押し込める。散らばったプリントをせっせと拾い始めた。

「どうもすみません」

武藤先生も屈んで、プリントを拾い集める。心臓が跳ねて、肩が一瞬動いてしまったのを自覚して耳まで熱くなった。気づかれなかつたらどうか、と、そっと武藤先生の方へ視線を向ける。

武藤先生は手早くプリントを集めていた。大きな手、と桜木さんは思わず見惚れてしまう。丁寧にアイロンのかかったワイシャツ、見本のようにきちっと締まったネクタイ。武藤先生は自分でアイロンをかけたりにしているのだろうか。そうだといい、そうに違いない、と思う。

手を止めて、知らぬ間に見入っていると、武藤先生と目が合った。

たまたま顔を上げただけ、という風を装って、再び桜木さんはプリントを拾うのに熱中する。ほとんどを、すでに武藤先生が拾っていた。

「ありがとうございました」

最後の一枚まで拾い終わってしまって、武藤先生が立ち上がる。緩慢な動作で桜木さんも立ち上がったけれど、いくらゆっくりと立ち上がっても数秒もかからない。スカートの皺が気になったけれど、プリントを持っていて隠すことも伸ばすことも出来なかった。

「いえ、ぶつかって、すみませんでした」

自分の、違うところから声が出ているような気がしながら、桜木さんはプリントを武藤先生に手渡した。いくらも拾えていないことが、武藤先生に見惚れていたことを知られてしまうようで

恥ずかしい。

「こちらこそ。急いでいたものですから。失礼しました」

武藤先生が桜木さんからプリントを受け取る。指先に触れるまであと3ミリ。ぴり、と桜木さんの爪が震えた。

チャイムが鳴る。教会の鐘の音かと桜木さんは疑った。

「予鈴ですね。では、すみません、ありがとうございました」

軽く会釈をして、早足で武藤先生は行ってしまふ。

「惜しいことを、したかなあ」

桜木さんは触れなかった指先を、反対の手で名残惜しげにつまんだ。

11話 ヤキモチ（森さんと鳥野くん）

森さんはまるでフグのように頬を膨らませていた。

「フグの真似？」

「もっと可愛いものに例えてください」

鳥野くんが言うと、森さんは頬をへこませて口を尖らせる。

「今度はタコだ」

「違います」

森さんは唇を横に引いた。

ふ、と息を吐いて森さんは本題に戻る。

「前の時間、隣のクラスの女の子に教科書貸してました」

「だから何？」

「わたしも貸してほしいです」

「いや、同じクラスだし。意味が分からないから」

「だって」

森さんはシャツのお腹を片手で握る。言い募ろうと口を開いて、やっぱり閉じた。

「だって、何？」

「何でもないです」

森さんはまた頬を膨らませそうになって、顔を逸らすことで回避する。

「ふ」

けれども、鳥野くんが笑った気配に、急いで顔を戻した。

「笑いましたか」

「だって」

「だって、何ですか」

「さあ、何でしょうかね」

鳥野くんは珍しく機嫌が良さそうに笑みを見せながら、次の授業の教科書を机の上に出した。

12話 ごめんね（千草くん）

「ごめん。好きな人がいるんだ」

言いながら、千草くんは格好つけた台詞だなあと嫌気が差した。

使われていない空き教室。どこか滞っている空気に、呼吸も不自然になる気がした。校庭では、部活動を始めたサッカー部か野球部か、はたまた陸上部か、いちにーさんしー、と準備体操を始める声が響いてきていた。

す、と息を吸い込んだのは目の前で直立不動だった女の子だ。隣のクラスの子で、千草くんも名前と顔は知っていた。知っていた。その程度だ。彼女にとってはあるいは残酷な事実かもしれない。

カーテンが揺れる。窓を開けたのは千草くんではない。彼女のほうが先に来ていたので、彼女が開けたのだろう。

「うん。分かった」

小さな声で、彼女が言った。言葉尻が震えていた。

「ありがとう」

ぎこちなく微笑んでみせる。

「うん」

気の利いた台詞も思いつかずに、千草くんは頷いた。彼女は頭を下げると、早足で教室を出て行く。

いつの間にか止めていた息を、千草くんは吐き出した。

「泣かせちゃった、な」

涙は見なかったけれど、たぶんこの後彼女は泣くんだろう、ということくらいは想像がついた。

「あーあー」

埃っぽい机に体重を預け、背を反らして天井を仰向く。影がちらちらと揺れて眩しかった。

「あーあ」

首が痛くなるまで仰向いてから、反動をつけて体を起こす。

「俺もいつか泣いちゃうのかな」

思い出して、窓の方へ向かった。窓に映った自分の顔を見て、ぐっと眉根を寄せる。風を吸い込むと、ぱたりと窓を閉めて、鍵を下ろした。

13話 五十嵐さんは男前

的に当てることが大事なのではない。

正しい姿勢で綺麗な射を放てば、自ずと矢は的の中心に吸い込まれていくのだという。

五十嵐さんは呼吸を整え、的前に立った。弓と矢を構え、一度、的を確認する。

反射的に止めた息を、静かに吐き出していく。

矢をつがえ、弦を引くために腕を上げる。的を見る。

もう一度呼吸を確かめる。

弦を引いていく。腕で引くのではない。足を踏ん張り、下腹に力を入れ、全身で引いていく。

瞳は的だけを見つめている。

体を開くように、矢を放つ。

たん、と小気味の良い音がした。矢は的の中央を貫いている。

ほう、とまだ的前に立てない一年生たちの間からため息が洩れた。

「五十嵐先輩、格好いいね」

「うんうん、素敵」

「憧れちゃうなあ。わたしもあんな風になれるかなあ」

憧憬の視線を送りながら、声をひそめて囁きあう。

五十嵐さんは射を終えて、ふう、と肩の力を抜いた。

的前を開けて、弓を置く。

「痛っ」

と、五十嵐さんの後ろで弓を引いていた女性徒が、矢を放った途端に声を上げた。

彼女のかけていたらしい眼鏡が床に落ちている。

「大丈夫か？」

すぐさま五十嵐さんは歩み寄って、眼鏡を拾い上げた。眼鏡は無事だ。

「うん。やっぱり時代はコンタクトなのかねえ」

ははは、と笑いながら、彼女は弓で打ってしまったらしい頬を押さえていた。

「見せて」

五十嵐さんはしかし笑わずに、頬を押さえていた彼女の手を取ると、真剣な眼で様子を窺う。

「大丈夫だって、初めてじゃないし」

「赤くなってるわね」

低い声で呟いて、心配そうに目を細めた。

かーっと女性徒の頬が別の意味で赤味を増す。

「だ、大丈夫、大丈夫。もう、逆に心臓に悪いから、五十嵐さん」

「そう？ ちゃんと冷やしたほうがいいわよ？」

そんな一部始終を凝視して見守っていた一年生五十嵐先輩ファンクラブ一同は、一様に恍惚のため息を洩らしたのだった。

14話 恋人同士って何するの？（女の子組）

「ねえねえ、リンリン」

「何ですか、桜ちゃん」

桜木さんは好奇心でキラキラ光る瞳を、森さんに向けた。

お昼休み。机を向かい合わせにくっつけて、昼食を食べていた。森さんはお弁当。桜木さんは購買で買ってきたらしいパンである。

「森さんと鳥野くんは恋人同士なんだよねえ」

「そうですよ」

にこりと答えて、森さんは卵焼きを口に運んだ。

桜木さんは口を開けかけてたパンの袋を胸に抱えて身を乗り出す。

「恋人同士ってどんな感じ？ いつも何してるの？」

わくわく、という効果音はその瞳から聞こえてきそうだった。

「どう、と言われても……。一緒に帰ったり、ええと……」

森さんの目が泳ぐ。

「手は？ 手はつないだ」

「はい、つなぎました」

はっきりと答えられる質問に、森さんは勢いよく頷いた。

「ほ、他には？」

「他……」

箸を空中で止めて、森さんはぴしりと固まる。

懸命に記憶を探るが、冷たくあしらわれる場面しか思い出せない。

「腕を組んだり、別れ際にちゅーしたり、寝る前にはお休みってメールしたり？」

「……」

森さんはそっと目を逸らして、水筒からお茶を注いだ。

「ねえねえリンリン」

森さんはお茶を飲んで、一つ息を吐いた。

「桜ちゃん、それって、桜ちゃんが好きな人としたいこと？」

「う」

「そうなんだ」

「やーだもう、リンリンってば」

桜木さんは、ぎゅっとパンを押しつぶした。

15話 恋人同士って何するの？（男の子組）

「なあなあ、鳥野一」

「何」

泉くんは好奇心でピカピカ光る目を、鳥野くんに向けた。

お昼休み。学食の行列に二人は並んでいる。量が多いと評判の学食なので、並んでいるのは男子生徒ばかりだ。

「鳥野と森さんは恋人同士なんだよな」

「それが？」

空腹のせいか、少々ご機嫌斜めに、鳥野くんが答えた。

泉くんは構わず、がしっと鳥野くんの肩を掴んでせまる。

「森さんってどんな感じ？ 彼女になると、すごい甘えたりするわけ？」

あれこれ妄想しているような泉くんの様子に、鳥野くんはとりあえず肘をみぞおちに埋めておいた。

「どうだっていいだろう」

鳥野くんの瞳が一層冷ややかになる。

「容赦ないな、鳥野……。で、毎日手をつないで帰ってるってのは本当か？」

「ふん」

お腹を押さえながら尋ねる泉くんに、鳥野くんは少し勝ち誇ったように口の端を上げた。

「うわー、腹立つなー。で、他には？」

「他……」

鳥野くんはちょっと眉を寄せる。

記憶を探ってみたら、のほほんと能天気な微笑む森さんばかりが出てきた。

「何だよー。一人でにやけやがって」

「うるさい。お前に教えてやる義理はないだろう」

のろけやがった、とわめく泉くんは放っておいて、進んだ列に、鳥野くんは歩を進めた。

16話 雨宿り（千草くんと森さん）

突然の夕立で、千草くんは唇を曲げていた。

「見たいアニメの再放送があったのになー」

どしゃどしゃと降る雨に悪態を吐いても、あっという間にかき消されてしまうだけだ。

走って帰ってもいいけれど、と千草くんは考える。

どうせ帰るだけなのだから、体が濡れるのは何ともない。ただ、明日も学校だし制服がずぶ濡れになるのは多少まずい気もする。まあこれも頑張っただけで乾かせばどうにかなるだろう。鞆の中身もずぶ濡れになる可能性が大いにある。しかしこれも、いっそのこと全部学校に置いて帰っても、どうということもないだろう。

よし、と息を吸い込んで駆け出す姿勢をとったところで、

「あら、千草くん？」

と、千草くんにとって天使のエフェクトがかかった声に息を止められた。

「うお、森ちゃん」

はっ、と塊みたいな息を吐き出した後で、目を大きく見開いて千草くんは振り返った。

「すごい雨ねえ」

森さんは両手で鞆を持ち、千草くんの隣りに並ぶと、背を屈めて雨の落ちてくるところを見上げるような姿勢をとった。

「森ちゃん、一人なの？」

「委員の仕事で遅くなっちゃって」

森さんは屈んでいた背を戻して真っ直ぐ立つと、千草くんを向いて小さく笑った。

「傘は？」

「こういう日に限って、折り畳み傘、鞆に入っていないのよねえ」

あーあ、と森さんはため息を洩らしたが、千草くんはすべての運命と神さまに感謝していた。

「ついてないよなー」

にこにこ千草くんは言う。

「そうね。でも、夕立ならすぐ止むと思うし、ぼーっと雨宿りするのって嫌いじゃないかも」

「雨宿り、好き？」

「ええ、好きよ」

微笑む森さんに、えへー、と千草くんもしまりのない笑みを返した。

ざあざあと雨が降る。

千草くんには、バケツをひっくり返したような雨音も祝祭の歌に聞こえた。

17話 妄想お花畑（桜木さん）

「あのねあのね！」

声を弾ませて、桜木さんが森さんの机までやって来た。

「はいはい、どうしたの？」

どうせまた武藤先生の話だろうと目を細めて、森さんは耳を傾けた。

「お弁当作戦はどうかしら、と思って！」

ふふふ、と桜木さんは自分の思いつきに笑みを噛みしめている。

「お弁当を作ってあげるとのこと？」

「そう！ こんなに料理が上手いなんて一って驚かせて、わたしを大人の女として見直されちゃったりして！」

でへへ、と桜木さんは頬を押さえて体を捻った。

「桜ちゃんって料理得意だったかしら」

「おにぎりとか？」

「それに、武藤先生はいつも愛妻弁当っていう噂を聞いたような」

「う」

桜木さんは頬に当てていた手を前に寄せた。あらあら可愛い顔になっちゃってるわ、と森さんが微笑む。

「じゃ、じゃあ！ 保健室作戦！ 先生の前でくらくらと倒れてお姫様だっこで保健室まで連れて行ってもらうの！」

ばーん、と森さんの机に勢いよく手をついて、桜木さんが言った。

「急に怪しくなっちゃったけど」

森さんは苦笑する。

「ど、どうしよう。お姫様だっことか、そんな」

一方の桜木さんは自分で言い出したシチュエーションに身悶えている。

「心臓が破裂しちゃうかも。もうちょっと誠実なところからいかないと」

「そうかもしれないわね」

森さんの返事はだんだん生温くなる。

「じゃあじゃあ、わざと遅くまで残ってて、真っ暗になっちゃって、家まで先生の車で送ってもらうとか！」

「大胆ねえ」

「お休みの日に、勉強教えてくださいーってお家に押しかけちゃうとか！」

「積極的だわ」

「もういっそのこと、ウェディングドレスを着て浜辺で追いかけてっことか！」

「意味が分からないけど、楽しそうねえ、桜ちゃん」

大人っぽく微笑んだ森さんに、うん！と桜木さんは元気よく答えた。

18話 恋について（泉くんと森さん）

「男に女の子にモテる方法を訊いても埒があかないと俺は悟った」

森さんの前の席に腰を下ろして、泉くんが言った。

「そうですか」

森さんは突然の話題に、とりあえず目を瞬いた。

「そこで、森さんに相談したい。彼女が欲しいんですけど、どうしたらいいですか」

泉くんの瞳は真剣だった。

「そうですね」

森さんは瞬きを繰り返す。

「ええっと、まずはやっぱり好きな人がいないと仕方がないのでは？」

常識的な答えに、力尽きたように泉くんは机に伏した。

「そんなまだるっこしいことじゃなくて、ぱぱっと彼女が欲しいんだってばー」

「まあ」

森さんは目を瞬く。

放課後の教室で、森さんと泉くんは学級委員の仕事をしていた。プリントのホチキス止めという地味な仕事に、泉くんはもはや飽きてしまったらしい。泉くんの頭に机を塞がれて、森さんも仕事にならなかった。

「ヒトデナシだと思う？」

伏せたまま、泉くんが呟いた。

「今の台詞だけ聞くとねえ」

「想って、想われてって、何かいいじゃん。片思いじゃなくて、両思いがいいの、俺は」

「贅沢者」

「恋に恋するお年頃なのさー」

「わたしは仕事をして早く帰りたいです、泉くん」

「へーい」

泉くんはのそっと体を起こすと、途中だった仕事をさっさと再開した。ぱちんぱちんとリズムよくホチキスで綴じられていく音が響く。

「森さんと鳥野は、いつから付き合ってるの？」

しばらく大人しく作業を続けていた泉くんが、ぼつりと尋ねた。

「いつからだったかしら。幼なじみでずっと一緒だったし、何となく？」

「いいよなー。何となくで赤い糸見つけちゃってたんだ」

「ふふふ、羨ましかろう」

「羨ましい。どうしたら見つかるのかな、そんな人」

「あら」

森さんは手を止めた。ホチキスの音が単音になる。恥ずかしいことをすっかり洩らしてしまった、というように、黙々と泉くんは手を動かしていた。

「見つかるわ、心配しなくても」

「そうですかねー」

「そうですよ」

ホチキスの音が再び和音になり、チャイムが静かに、時の区切りを告げた。

19話 アイコンタクト（森さんと鳥野くん）

「長年連れ添った夫婦のように、目と目で通じ合いたいのです」

また妙なことを言い出したな、という目で鳥野くんは森さんに一度視線を向けた。そして再び読みかけの本に目を戻す。

放課後の図書室はほどよいざわめきの中にあった。森さんと鳥野くんが向かい合って座る大机の反対側の端では、女の子が三人、静かな声で宿題を教えあっている。カウンタでは、図書委員と司書教諭が時々小さく笑いながら話をしていた。書架の間にもちらほらと人影が窺える。開いた窓からは、運動部の元気な声が飛んできていた。

「さあさあ、鳥野くん。わたしが今何を考えているか、当ててみてください」

鳥野くんの視線によるメッセージには気づかずに、期待を込めた瞳で、じーっと森さんは鳥野くんを見つめた。

「……………鳥野くんは読書をしたみたいだから、少しは黙ってようかしらー」

棒読みで鳥野くんが言った。

「……………」

森さんは顎を引いて押し黙る。鳥野くんはちょっと眉を上げてから、読みかけの本に戻った。

鳥野くんが静かにページを繰る間、森さんは大人しく鳥野くんを見ていた。鳥野くんは一向に気にせずに、ページを繰る。やがてチャイムが鳴って、下校を促す放送が流れた。少しざわめきが大きくなって、図書室にいた生徒たちが動き出す。鳥野くんもよみかけのページに葉を挟んでぱたりと閉じた。

「その本、とても面白い本なのですね？」

「なに？」

怪訝そうに目を上げた鳥野くんに、森さんは組んだ手に顎をのせて微笑んだ。

「ページを繰るのがいつもより速かったです。それに、読んでいる間、とても機嫌が良さそうでした」

当たり前でしょう？と少し得意そうに森さんが唇の両端を綺麗に上げた。

「ハズレ」一言ずつ区切るように、鳥野くんが言う。「つまんないよ、別に」閉じた本で森さんの頭を軽く叩いた。

「照れちゃって」

可笑しそうに森さんが言うと、鳥野くんが本の角を向ける。

「何考えてるか当ててみて」

怖い声で鳥野くんが言った。

「森さんには敵わないぜー」

語尾にハートマークをつけて、森さんが言った。

鳥野くんは呆れたようにため息を吐く。

図書委員の、下校を促す呼び声に二人は立ち上がった。

「ねえ、当たりでしょう？」

覗きこむように尋ねてくる森さんを、鳥野くんは不機嫌そうに睨み返した。

20話 五十嵐さんと恋の話（泉くんと五十嵐さん）

泉くんは五十嵐さんの前の席に腰を下ろした。

「五十嵐って好きな人とかいの？」

前振りのない問いかけに、五十嵐さんは表情に困った。とりあえず、相手が泉くんなので、眉をしかめておく。

「どんな答えを期待しているのか知らんが、答えてやる義理はないな」

そっけなく言って、ついでに睨んでやる。

「んー、単なる好奇心なんだけど。五十嵐ってそういう話しなさそうだし、面白いかなって」

睨まれたことに一切ダメージを受けた様子もなく、白い歯を見せて泉くんは笑った。

「不謹慎な奴だな」

「お褒めにあずかり。じゃあ、好きなタイプとかは？ そんならいあるだろ」

「お前みたいなちゃらんぽらんな奴だけはお断りだ」

きっぱりと告げる五十嵐さんに、泉くんは愉快そうに口角を上げる。

「俺とは正反対の奴がタイプってことかー。優等生タイプ？ それとも硬派な感じ？」

「知らん、そんなの」

五十嵐さんは腕を組む。

「俺はねー、どっちのタイプの女の子も可愛いと思うなー」

「お前の好みなんぞ訊いてない」

半眼で呆れた様子を隠さない五十嵐さんに、くすくすと泉くんは笑いを洩らした。

「でも、恋したらきっと一途な感じだよね、五十嵐は」

「お前はすぐに浮気しそうだな」

五十嵐さんの言葉に、泉くんは確かに確かに、と笑いながら頷いた。

「笑い事じゃないだろうに」

「いやー羨ましいくらいイイ男だね、五十嵐は」

「殴られたいのか」

拳を上げる五十嵐さんに、泉くんは手の平を上げて眩しそうに目を細めた。

21話 森さんについて（鳥野くん）

森さんは変だ。

「鳥野くん鳥野くん」

何が可笑しいのか知らないけれど、話しかけてくるときはいつもへらへら笑っている。

「見てください、雀です」

しかも内容は大抵下らないことだ。雀なんか、珍しいものでもあるまいに。

森さんは髪が長い。邪魔そうだな、とか、夏は暑いんじゃないかな、とか思っていると、視線に気づいた森さんが、ぱっとスライドを切り替えたみたいに笑顔になる。

「わたしに見惚れていましたね？ 鳥野くん」

どうしてそう、自惚れているのか。

頭にきたので髪の毛をぐしゃぐしゃにしてやると、嬉しそうに森さんは肩をすくめる。

森さんは、どんなにそっけなくしても構ってくる。それはもううっとうしいくらいだ。

「いや、手はつながないから。暑いし」

「腕を組んでみましようか？」

「もっと暑苦しい」

「隣りを歩いてもいいですか？」

「好きにすれば」

言い捨てるように告げたのに、森さんはご機嫌そうに横に並んだ。喜ばせるのなんか簡単すぎるから、嫌がらせをしたくなるけれど、結局喜んでしまう森さんはちょっとおかしいんじゃないかと思う。

「そんなアマノジャクだと、そのうち愛想を尽かされるよ」

言われなくても、分かっている。分からないのは森さんだ。もうとっくに愛想を尽かしていてもおかしくないのに。

「好きですよ、鳥野くん」

今日も俺の隣りで笑ってる。

森さんはやっぱり変だと思う。

22話 雨宮くんは嫌な人

昇降口の軒先で、微かに覗く空は重く、今にも雨が降りそうだった。

鳥野くんは鞆の中の折り畳み傘を確かめる。二人で入るには、小さすぎる傘だが、ずぶ濡れになるよりはマシだろう。そこまで考えて、鳥野くんは、雨が降るのを期待しているのか、と自問した。ため息をつきそうになる。

「あれ？」

声に、鳥野くんは物思いから引き戻された。ふっ、と雨気を含んだ冷えた空気が肺を抜ける。

「鳥くん。わあ、久しぶり」

「……………誰だっけ？」

うわーひどいー、と笑いながら、声をかけてきた彼は、鳥野くんの隣りに靴を落とした。一段高くなった簀の子の上から、鳥野くんの顔を覗きこむ。

「雨宮だよ。中学の時は仲良くしてくれたのに、忘れちゃったの？」

「過去は振り返らない主義だから」

覗きこんできた雨宮くんの笑顔を一瞥し、鳥野くんは顔を逸らした。

ええー？、と笑みを絶やさずに、雨宮くんは靴を履く。

「雨降りそうだねえ。湿気てて嫌だなあ。ほら俺、くせっ毛だからさ」

雨宮くんは空を上目に見て、前髪を引っ張った。

「……………」

鳥野くんは無表情に雨宮くんの背中を見る。後ろ衿が反対に折れていた。

「同じ高校に入ったのに、クラスが違うとなかなか会わないものだねえ。ね、せっかくだから一緒に帰ろうよ」

くるりと振り返った雨宮くんは、鳥野くんに笑いかけた。

「誰が帰るか」

鳥野くんは嫌な顔をする。

「何でさー。あ、そっか。彼女ができたんだっけ、鳥くん。あー今ももしかして、彼女待ち？」

「そうだよ」

「へーえ、ふーん」

にやにやと雨宮くんは鳥野くんを見つめた。

「気色悪い」

「ふっ。誰も好きになんかなれない鳥くんには彼女が出来たなんて、可笑しくって」

「何だよそれ」

「だってそうでしょう？ 周りにいる人なんてその辺の石ころくらいにしか思っていない鳥くんだもん。彼女を作るのなんか面倒くさがりそうな君なのに、どういう風の吹き回しなの？」

面白がるような瞳で鳥野くんを観察するように見つめる雨宮くんに、それはお前だろう、と鳥野くんは胸の内で吐き出した。

「別に。好きになったからだろ？」

吐き捨てるように言った鳥野くんの台詞に、雨宮くんは一瞬笑みを消して、瞬きを忘れた。瞬きを思い出したときには、笑みの種類を変えている。

「ふうん。やっぱり鳥くんって面白いな。また仲良くしようよ、ね？」

「嫌だね」

つれないなあ、と明るい笑みを置いて、雨宮くんは重そうな空の下を、軽やかに去っていった。

「お待たせしました、鳥野くん」

ようやく森さんがやって来たとき、空は重さに耐えかねたように、雨を地上に降らせ始めた。

23話 森さんと雨宮くん

森さんは自動販売機の前で悩んでいた。

「りんご、でしょうか。それともオレンジ……。いえ、ここはストイックにおしるこ？」
小銭入れを握りしめ、見つめる瞳は真剣そのものだ。

「この暑いのにおしるこって、なかなかシュールだね」

背中から話しかけられて、森さんは寄せていた眉を開いた。振り向く前に、後ろにいた人物が、森さんの横に顔を並べる。

「先、良い？」

「あ、すみません。気がつかなくて」

森さんは一歩下がって、彼に順番を譲った。雨宮くんだ。シャツの後ろの衿が半分上に折れている。

雨宮くんは迷わず野菜ジュースのボタンを押した。

「野菜ジュースって、色んな味が混ざって嫌じゃないですか？」

「そう？ お得じゃない？」落ちてきた缶を拾いながら、雨宮くんが言った。背中を起こすと、振り返って笑む。「久しぶりだね、森さん」

「はい、会いたくもありませんでしたが、わざわざ同じ高校まで追いかけてくるなんて、しつこい人ですね」

森さんも、雨宮くんと同じ種類の笑みを見せる。

「嫌だなあ。森さんのしつこさには敵わないよ。鳥くんにつきまとったあげく、無理矢理彼女にまでなっちゃったりしてさあ」

「負け惜しみですか？ 何を言われても鳥野くんはあなたには差し上げませんから」

背筋を伸ばして、森さんは自動販売機に100円玉を入れた。迷わずおしるこのボタンを押そうとしたところを、横から雨宮くに野菜ジュースのボタンを押される。

ガターン、と缶が落ちてくる音が響いた。

「健康にも良いし、おススメだよ？」

おしるこのボタンまであと1ミリのところで、森さんの人差し指が小さく震えた。

それじゃあね、と勝利の笑みを惜しげもなく向けてから、雨宮くんは背を向ける。その襟首を後ろから森さんは驚づかみにした。

「雨宮くん、後ろの衿が曲がっていましたよ？」

森さんが、渾身の力を込めて衿を伸ばしてやる。

「それはご親切にありがと、うっ……。ちょっと待て本気で締まるっ」

なかなか戻らない森さんを鳥野くんが探しにくるまで、雨宮くんは首を仰げ反らせる羽目にな

った。

24話 暑い日は冷たいジュース

「買って来たよー」

ジャンケンで負けた泉くんが、皆の分のジュースを抱えて戻ってきた。

「俺の胸でちょー温めておいたから！」

爽やかな笑顔で泉くんは机にジュースの缶を並べる。

「あ、俺いらない」

「わたしも遠慮しようかしら」

「あはははは、泉くん好感度撃沈だねえ」

鳥野くんと森さんは温度のない笑顔で、桜木さんは遠慮なく爆笑した。

「ひでえ、せっかく買って来たのにこの仕打ち」

泉くんは両手で顔を覆う。

「仲が良いんだねー。あ、俺、サイダーもらっていい？」

千草くんが手を伸ばすと、鳥野くんが素早く先にサイダーの缶を取った。しゃかしゃかと振って、

「はい、千草くん」

と無表情で手渡す。

「え、え？」

「わあ、それはもしかして、開けたら泡が吹き出すんでしょうか。一度目の前で見てもたかったんです」

「よっ。美味しいところを持っていっちゃってー」

戸惑う千草くん、森さんと桜木さんの期待の視線が注がれる。

「何。1組の人たち怖い」

「遠慮するなよ、千草っち。隣のクラスだって、仲間に入れてやるよ」

怯える千草くんの肩を泉くんは親しげにぽんぽんと叩いた。

「開けるしかないの！？ これ、俺が開けるという選択肢オンリー！？」

悲壮な顔でタブに指をかけてわななく千草くんは放っておいて、泉くんはりんごジュースを一本手に取ると、

「五十嵐！」

教室を出るところだった五十嵐さんに放り投げた。

「何をやるんだ危ないな」

顔面キャッチをすれすれで回避した五十嵐さんが、りんごジュースを手に泉くんを睨む。

「ナイスキャッチー」

泉くんはVサインを送った。

一方、千草くんが好きな女の子の期待と目に見える悲惨な結末の間で葛藤している中、鳥野くんはよく冷えているオレンジジュースを手を取った。構わず開けて飲もうとしたのを、止めて、きらきらと千草くんに期待のまなざしを送っている森さんの首に冷やりと触れる。

「ひゃあっ!？」

森さんの声に驚いて、思わず千草くんはタブを折った。桜木さんが手を叩いて笑う。あまりの騒がしさに、廊下を通りがかったらしい武藤先生が顔を出して、「何をしていますか、君たちは」と呆れたように失笑した。

空はまだ青さを孕んだまま、雲だけが夕陽に染まる。緑の匂いも濃い風が、薄く日焼けしたカーテンをふわりと大きく膨らませた。

25話 両思いになれなければ駄目なのでしょうか（桜木さん）

今日も今日とて桜木さんは妄想に忙しい。

「先生とあんなこと、こんなこと」
と、森さんに生き生きと語る。

「楽しそうね、桜ちゃん」

おっとりとした母のような、姉のような視線で、森さんは微笑む。

「楽しいようー」

両腕で頬杖をついて、桜木さんが笑みを返す。ほっぺたが落ちないように、支えているのかもしれない。

「何が楽しいのか俺にはわからないけど。だって、いくら想像したって、それが現実になるはずないだろう？」

隣の席で、鳥野くんが呆れたように肩をすくめた。

「そんなの、これからどうなるか、わからないじゃない。先生がある日突然、わたしのすばらしい魅力に気づいちゃうかもよ？」

頬杖をついたまま、桜木さんは頬を膨らませた。

「うーん。わたしは桜ちゃんが楽しそうならいいかしらって思うけど、でも、やっぱり両思いになれる確率は低いでしょう？ それって、辛くないのかなあって時々心配になるわ」

「リンリンまでそんなこと言うー」

膨らませていた頬を両手で潰して、桜木さんはムンクのモノマネをした。本人にそんなつもりはなかったかもしれないが。

「なにになにー？ 恋の話かっ、俺に任せろー」

どこからともなくすっ飛んできた泉くんが、がしっと鳥野くんの首に腕をかけた。

「ぐっ……この変態がっ」

鳥野くんの肘が、泉くんのみぞおちに決まった。呻き声を上げて、泉くんは鳥野くんから腕を離すと胸を押さえてよろめく。

「大丈夫ですか？ 泉くん」

「もう駄目。慰めて？ 森さん」

よろよろとよろめきながら、泉くんは森さんの肩に手を置いた。

すかさず盛大に教科書が泉くんの顔面を打ち、ヤキモチですかーと森さんが嬉しそうに鳥野くんを見つめた。

「てて、まあ、ともかく、俺は桜木さんの気持ち、ちょこっと分かる気がするよ」

鼻の頭をおさえながら、泉くんが言った。

「聞いてたのかよ」

「恋の話題は聞き逃さないぜ！」

得意げに泉くんが親指を立てる。

「両想いになれなかったって、そんなの関係ないじゃん。好きっていうだけで、そんな奴がいるだけで、すごいことなんだからさ。受験じゃないんだ。恋は結果じゃないだろう？ 楽しんでなんぼだっただの」

「泉くん……」

「……ただの負け惜しみか」

ふん、と鳥野くんが鼻で笑う。

「なっ！ 俺、今すごく良いこと言った感じだったのに！ 台無しじゃん」

泉くんが叫ぶ。

「まあその辺が泉くんクオリティだよな」

「ふふふ、そうね」

「そんなあ」

泉くんが情けない声を上げたところでチャイムが鳴り、ドアから武藤先生が入ってくる。

「やっぱり、好きだなあ」

誰にも聞こえないように、桜木さんは呟いて、引き出しから出した数学の教科書を、一度胸に抱きしめた。気持ちが零れてしまわないように、大事に閉じ込めたつもりなのかもしれない。

26話 恋ができなければ乙女ではないのでしょうか（五十嵐さん）

部活が終り、五十嵐さんは更衣室で袴から制服へ着替えているところだった。

「ねえねえ聞いてよー、ついに、雨宮くんのメアドゲットしちゃった」

「おお、やったね結ちゃん」

「へっへっへー、由ちゃんもがんばれー」

五十嵐さんの後ろで、そんな会話が展開されていた。

「恋する乙女かお前ら可愛い奴らよのう」

五十嵐さんの隣りで着替えていた女性徒が、結っていた髪をほどいて、ふっと笑う。

「きゃっ、小松先輩」

「可愛いなんてそんな」

結と由が双子のように両手を口元に当てて照れたようにはしゃぐ。

「可愛い可愛い。女の子って感じさねー。な、五十嵐？」

小松先輩に、いきなり話しを振られて、五十嵐さんは瞬いた。

「え、あ。はい、可愛いと思います」

「きゃー五十嵐さんにまで」

「きゃーきゃーどうしようー」

結と由は手と手を取り合ってはしゃいだ。

そんな二人を見て、五十嵐さんは微笑みながら、胸に溜まった息を静かに吐き出した。

「恋、かぁ」

「ほほーう。五十嵐も、ついに恋愛ごとに興味を持ったか？」

にやり、という形容が似合う笑みで、小松先輩が五十嵐さんを横目で見やった。

「ええっ、五十嵐さん恋してるの!？」

「ショック! ううん、でもでも全力で応援するけど!」

ぐわっと結と由が瞳を輝かせて、五十嵐さんに詰め寄った。

「いや、そんなんじゃないよ」胸の前に両手を上げて、五十嵐さんは苦笑しながらわずかに身を引いた。「ただ、わたしはそんな、結たちみたいに可愛くなれないなあって思っただけで」

「何を言っている。そんな五十嵐が可愛いぞ」

「へ？」

思いがけない小松先輩の台詞に、五十嵐さんは間の抜けた顔と声になってしまった。

「うんうん、そんな五十嵐さんが可愛い!」

「格好良くて可愛いなんて、五十嵐さん素敵!」

結と由がっそう瞳を輝かせて、五十嵐さんに詰め寄る。

「わ、ちょっと」

困った視線を小松先輩に向けると、何故か素晴らしい笑みとVサインが返ってきた。

「モテモテで羨ましいぞこのやろう」

「小松先輩っ！」

27話 三角関係（森さんと鳥野くと雨宮くん）

「あ、いたいた。鳥くーん」

雨宮くんが、教室の入り口で手を振った。時は昼休み。手にはお弁当らしき包みを持っている。

「あらあら、ごきげんよう。雨宮くん」

受けて立ったのは、鳥野くんではなく、森さんだった。立ちふさがる壁のように、雨宮くんの正面に仁王立ちに手を腰に当てる。

「…………鳥くーん」

雨宮くんは、森さんの肩越しに頭をのぞかせて、再び鳥野くんを呼んだ。森さんはすかさず、さっと手を上げて、雨宮くんの視界を塞ぐ。

「無視するなんて、紳士らしくないと思います」

「…………君に用はないからどいてくれないかな」

「あなたと喋ると鳥野くんが汚れます」

「綺麗なままよりいいんじゃない？ 君こそ、あんまり執着すると嫌われるよ？」

「あなたに言われたくありません」

火花を散らし、両手を組んで、押し合っている状態だ。

「二人とも、邪魔」

ごうごうと燃える炎にあっさりとお水をかけたのは、鳥野くんの冷たい声だった。

「鳥くん、君の彼女（仮）ってばものすごく意地悪だよ。早々に縁を切るべきじゃないかな」

「鳥野くん、安心してください。こんな嫌な人、絶対あなたに近づけませんから」

一遍に二人は鳥野くんに訴えて、何おう、と再びお互いをにらみ合う。

「どうでもいいけど」

鳥野くんはため息を吐いた。

「俺はもう、お昼食べ終わったから」

「え？」

「ええ？」

ぴたりと思考停止する二人にはもはや視線もくれずに、鳥野くんは教室を出て行く。

「どうしてくれるんだよっ、お前のせいで鳥くんと一緒に楽しいランチタイム、という俺の計画が台無しじゃないか。せっかく、鳥くんに上げようとだし巻玉子まで作ってきたのに！」

「あなたこそどうしてくれるのですかっ。わたしだって、鳥野くんとラブラブランチタイムをす

るはずだったのに。今日のりんごは兎さんなんですよ！」

雨宮くんと森さんのいがみ合いはさらに下らない主張に発展し、昼休み終了のチャイムと同時に、二人のお腹の虫も虚しくため息を吐いたのだった。

28話 惚気話（千草くんと鳥野くん）

なぜだ、と鳥野くんは頭を抱えたい気持ちだった。実際には、額を手に置いて深くため息をつくにとどめた。だが、それで憂鬱が逃げてくれるわけでもない。

「ため息を吐くと、幸せが逃げてっちゃうよ、鳥野くん」

のほほんとした声が、親切に忠告してくれる。

原因はその声の主だったのだが、当の本人は邪気のない顔で首を傾げる。

「それにしても、ラッキーだったなあ。一度、鳥野くんとゆっくり話してみたかったんだよね」

「いや、えーっと千草、だっけ？ 俺は別に話すことはないから」

こういう手合いには遠回しに言っても通じまいと判断し、鳥野くんは気を取り直してきっぱりと言った。

入り口でチャイムが鳴り、いらっしゃいませーと店員の声が響く。

ファーストフード店である。ちょっと小腹が空いたので、寄り道をしたのが鳥野くんの運のつきだった。後からやってきた千草くんに発見されて、向かいの席を占領されたのは数分前のことである。

千草くんはアップルパイを箱から口で引きずるように少し出して齧った。

「あつ」

口を離して、眉をしかめる。鳥野くんはアイスコーヒーをストローで啜って、千草くんの言葉を待った。

千草くんは、はふはふと次の一口を食べると、鳥野くんの視線にようやく気づいて、口の端を指で拭う。

「あ、一口欲しい？」

「いらないよ」

がくっと肩を落とす鳥野くんに千草くんは首を傾げた。

「鳥野くんって、よく森ちゃんと一緒にいるでしょう？」

「だから？」

向けられた話題に、鳥野くんは一層うんざりした顔をする。

「羨ましいなあって。ああでもあんまり近くにすぎたら、毎日嬉しくて顔がにやけすぎちゃうかも」

言いながら、想像したのか千草くんの頬が緩む。

「……」

何と答えたものが言葉に詰まり、鳥野くんは沈黙を守った。ハンバーガーに手を伸ばす。こうなったら、早く食べ終わってこの場から立ち去りたい。

「可愛いよね、森ちゃん。優しいし、品があるし、何ていうの？ 女神？ 天女？」

鳥野くんは思いきりむせた。

「だ、大丈夫、鳥野くん？」

「おまえこそ大丈夫か。異星人か？」

「あはは、意外と面白い人なんだね、鳥野くん。怖い人かと思って今まで話しかけづらかったんだけど、思いきって声をかけてみて良かったよー」

「…………俺もあんたがこんな奴とは思わなかったよ」

千草くんはご機嫌な笑顔になり、鳥野くんはげっそりと脱力した。

「嬉しいなあ。えへへ、今日は森ちゃんがいかに魅力的かについて、とことん語りつくそうね！」

返事の代わりに鳥野くんは食べかけのハンバーガーをアイスコーヒーで流し込んで、

「ちょっと急ぎの用があるから」

と競歩で店を後にした。

「それじゃあまたの機会にねー」

千草くんは鳥野くんの背中に手を振って、もう冷めたアップルパイを齧ると、美味しい、と幸せの花を飛ばした。

29話 好きについて教えて（泉くんと桜木さん）

泉くんが手を上げた。

「質問です、桜木さん」

放課後の教室、桜木さんは下校の巡回に回ってくる武藤先生を今か今かと待っているところだった。

「なあに、泉くん」

そわそわと窓から渡り廊下を見張っていた視線を教室内に戻して、桜木さんが答える。

「桜木さんは、武藤先生が好きなんだよね」

「わーわー！」

さらりと言った泉くんに、慌てるように桜木さんは両手で空中を叩いた。

きよろきよろする桜木さんに、泉くんは肩をすくめる。

「誰もいないよ」

「もうー！ いなくても駄目！ そういう大事なことはね、他人が簡単に言葉にしちゃ駄目なの！」

桜木さんが、怒って少し強い調子で言う。

「なるほど」

「何がなるほど？」

「恋してる女の子は可愛いね」

恥ずかしげもなく言って、泉くんが微笑む。

「そういうことも、簡単に言うもんじゃないよう」

桜木さんは指をそろえて、直角に泉くんの脳天に手を下ろした。

「ちえ。いいなー、武藤先生。俺もそんなふうにかれたいなー」

「わたしは先生一筋なので、他を当てるべき」

ちらりともなびかない桜木さんに、ちえー、と口では拗ねながら、目では笑う。

「どこがそんなにいいの？ すっげ一年上だし、硬そうじゃん」

「そこがいいのよ」

理解されないことが、まるで嬉しいことだというように、桜木さんは頬にたっぷり笑みを含んで語尾を弾ませた。

「年上が好きなの？ 桜木さん」

「たまたま好きになったのが先生ただだけよ」

「好きになったきっかけとかあるの？」

泉くんの質問に、うーん、と桜木さんは答えを渋った。

「それは、内緒」

「何だよー。俺もそんな色っぽい秘密ほしいなーちくしょー」

「はっはっは」

腰に手を当てて、桜木さんが笑う。

「じゃあじゃあ、好きってどんな感じ？」

「どんな無邪気な質問なのよ、泉くん」

「だーってさ、気になるから」

悪びれずに、にこにこ泉くんは答えを待つ。

「えー……」

と、桜木さんが何と答えようかととりあえず口を開いたとき、がらりと教室のドアが開いた。

「そろそろ下校の時間です。早く帰りなさい」

「はい」

間延びした返事をしたのは泉くんだけだった。声をかけた武藤先生は、すぐに隣の教室へ向かってしまう。

「……桜木さん」

武藤先生が去ったのを見届けた後、泉くんは机の下の桜木さんをひょいと覗き込んだ。もぐったときに頭を打ったのか、両手で押さえている。

「い、痛い」

「何で隠れるかな」

まるで理解できずに、泉くんは不思議そうな顔をした。

「恋してるからだよ！」

痛さに涙目になった桜木さんは、恥ずかしさでやけっぱちに叫んだ。

30話 君が好き（森さんと鳥野くん）

森さんは、じーっと鳥野くんを見つめていた。

休日に、鳥野くんの家に押しかけてきた森さんである。鳥野くんは、構わずに本を読んでいたが、やがてため息を吐くと、視線を上げた。

「何」

「見つめていました」

「それは言われなくても分かるよ」

「うふふふふ」

「何で笑うの」

呆れたように肩をすくめて、それ以上相手にせずに、鳥野くんは読書に戻った。

空腹を感じて、鳥野くんがキリの良いところで本を閉じると、森さんはソファに座って眠り込んでいた。

「何しにきたんだか」

本を置いて、ソファの背もたれに手をかける。落ちた前髪が、森さんの前髪と触れ合った。

「間抜け面」

鳥野くんは呟くと、顔をあとわずか数センチ下げてから、森さんから離れた。

よい匂いがして、森さんが目を覚ますと、鳥野くんが皿を二つ、テーブルに置いたところだった。

「昼、食べるだろ？」

「食べます」

良い夢の続きにまだ半分体を残しているように、心にやりと森さんが微笑んで返事をする。

雲を踏むような足取りでテーブルにつくと、湯気の上だったミートソースのパスタを前にして、ようやく目を覚ましたというように、わあ、と目を見開いた。

「いただきます」

両手を合わせて、フォークを手にする。パスタを巻き取りながら、ちらりと向かいの鳥野くんに目を向けた。

お腹を空かせていたのか、ぱくぱくと鳥野くんはスピーディにパスタを平らげていく。

「何、食べないの？」

「いえ、いただきます」

大事そうに、ゆっくりと、森さんはパスタを口に運んだ。

「さて、俺はちょっと本屋に行くけど」

「一緒にいきます」

洗い物を終えた森さんが、鞆を肩にかけた鳥野くんに慌てて駆け寄る。

玄関を出て、鍵を閉めたところで、森さんが尋ねた。

「鳥野くん、何か忘れ物はありませんか？」

「え。財布も持ったし、携帯も持ったし……」

鞆の中身を、鳥野くんは確認する。

「鳥野くん、鳥野くん」

森さんが、鳥野くんに期待の表情で手を差し出した。

「……そういう恥ずかしい言い回しは止めてくれないかな」

眉をしかめながら、鳥野くんは森さんの手を取った。

「まあ。洒落をきかせたつもりでしたのに」

「何ていうか、そういうのちょっと、おっさんっぽい」

「まあ！」

抗議を込めて森さんがぎゅっと握った手に力を込めると、鳥野くんはそれ以上の力を込めて握り返した。痛いですが、と森さんが鳥野くんの手を叩くと、まだまだだね、と勝ち誇ったように鳥野くんが口の端を上げた。

進化するボクラ【1】

<http://p.booklog.jp/book/24155>

著者：猫ト みかん。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/7hoshineko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24155>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24155>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.